

1. 10月例会の報告

10月24日(土) 東京大学で山川、小野両氏による発表が行われた。参加者：16名。山川氏には、これまで日本にあまり紹介されていない中国雲南省の地形と氷河に関して、小野氏には、日本を含めたアジア大陸東部の最終氷期の雪線高度・永久凍土帯の分布といった問題を背景に、中国青海湖・蘭州・五台山周辺の氷河・周氷河地形について発表いただいた。

2. 11月例会のお知らせ

— 寒冷地形談話会 11月例会 —

とき : 11月28日(土) PM2:00 -

ところ : 明治大学5号館2階 523号室

(JRお茶の水駅下車徒歩8分、不明の時は大学院棟6階地理大学院生室入口の掲示を見て下さい)

大貫 靖治(筑波大・院)
多摩川上流域の地形発達

八木 浩司(防衛大)
宮城県内に見られる最終氷期前半に発達した堆積段丘

早田 勉(パリノサーベイK.K.)
テフラに認められるインボリューションの層位と年代

3. サマースクールの報告(遅くなりましたが)

去る8月21-24日の3日間、1987年度のサマースクールを早地峰山周辺で行った。21, 22日前半は驚異の雨男、小岩清水会員の力か強雨となったので、予定を変更し大迫山岳博物館や遠野盆地・荒川高原・小田越峠付近の山麓緩斜面・岩塊堆積物・トア・テフラ・森林植生などを見学した。途中、アースハンモックの観察場所では案内者の沢口晋一会員の見事なスコップさばきによる断面作成と復旧に感嘆の声があがった。23日は驚異の晴れ男、上本進二会員の勢力巻き返しによってか天気も回復し、早地峰山山頂までの往復が実現でき、岩塊斜面の観察や早地峰ウスユキソウの可憐な姿を堪能できた。また、24日オブション巡検では前日までに見れなかったアイオン沢の崩壊地・アカエゾマツ林と一杯森のアースハンモックも見ることができた。最後に桧垣大助会員をはじめとする各案内者の方々と巡検中ご協力頂いた参加者の方々に心から感謝いたします。(参加者：24名(順不同、敬称略)×小岩、○西城、△沢口、▲清水、○杉田、○桧垣、○浅川、○井野、△岩船、◎上本、梅津、△金子、○木村、○工藤、△河野、○酒井、△高田、高橋、○富永、▲長島、○伯田、○樋口、深沢、△増沢……記号は晴男・雨男調査結果、◎-○-△-▲-×の5段階評価)

雲南省西北部の地形と氷河について

山川克己

(1) 地形概観

・昆明～大理～金沙江

雲南省の省都昆明は雲南(雲貴)高原の中西部に位置し、平均標高は約1900mで断層運動による陥没盆地の様相を呈する。大理州の州都である下関までの約400kmの間は、このような陥没盆地と標高2300m前後の侵食小起伏面が繰り返しあらわれる。侵食小起伏面上は中生代の赤色砂岩が広く分布し、赤色土、アカマツ林とともにこの地域の景観を特徴づけている。大理は昆明と同じ陥没盆地で、西に蒼山、東に断層起源の洱海を望む美しい街である。

・大理～明永

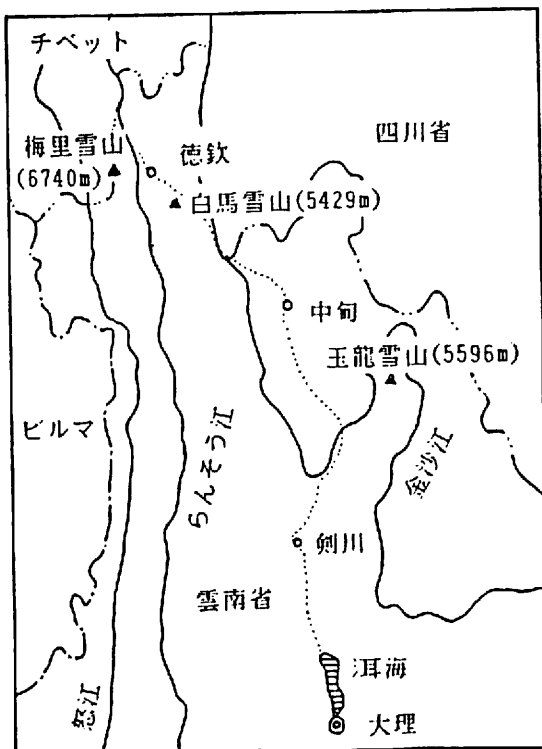
大理から金沙江(揚子江上流)までは雲南高原の続きで、侵食小起伏面と陥没盆地が繰り返し現われる。雲南高原の北部、および西部は、南北走行の高山と、金沙江、らんそう江(ㄇㄣˊㄙㄨㄤ)、怒江(ㄋㄨˊㄢㄩㄥ)などの峡谷が並行し、谷底と山陵との比高は3000mを越える。中旬は標高約3000mで、平坦な広い開析高原上に位置する。中旬から徳欽までの間がもっとも起伏に富んだ険しい道のりで、約2000mの上がり下がりを経る。金沙江とらんそう江の分水嶺(約4300m)にそびえる白馬雪山(5429m)の周辺は樹木もみられるが、全体に乾燥が著しく、高木はほとんど見られない。とくに谷沿いはフェーン現象により非常に乾燥しているため裸地が広く分布する。また、この山塊付近にはじ字谷が多く見られた。らんそう江支流の谷底に位置する徳欽(標高3300m)から半日ほどで、らんそう江の河畔近くの明永村に着く。

(2) 梅里雪山山塊

梅里雪山山塊はらんそう江と怒江の分水嶺に位置し、標高5000m以上の頂きには山岳氷河が発達している。主峰の梅里峰(太子峰、6740m)は、かつて英国の探険家K. WardによってKakapo(Ka:雪、Kapo:白)という名称で紹介されている。また、梅里峰から稜線沿いに南へ20kmほどの位置に、ピラミッド形の神女峰(6540m)がそびえている。らんそう江から2～3kmの範囲は著しく乾燥しており、放牧のためもあるが植生ははまばらで、裸地斜面が広がっている。しかし、山地に近づくにつれ亜熱帯から温帯の植生景観が広がり、らんそう江からの距離、および標高により降水量に著しい差があることを示している。

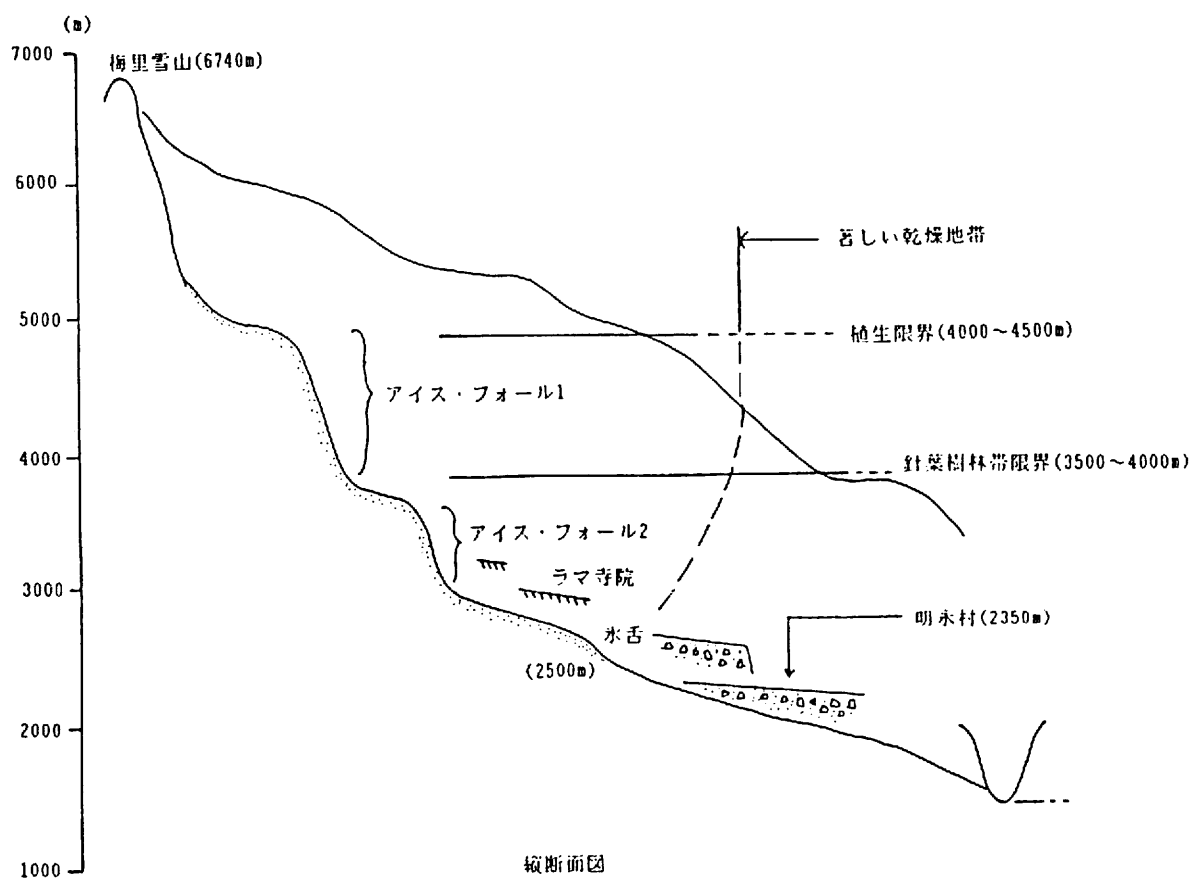
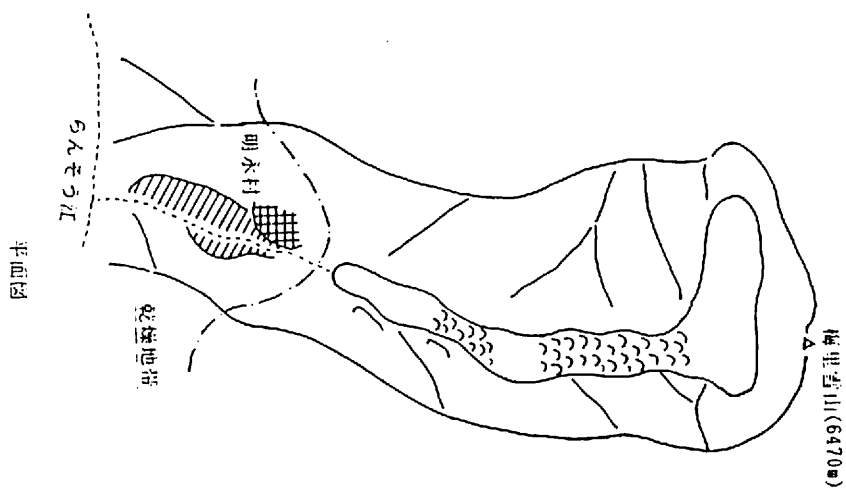
(3) 明永氷河

梅里峰でかん養された氷河は巨大なアイスフォールを伴い明永氷河となって流下している。氷河の末端(氷舌)高度は約2500mで、緯度(北緯28°)の割に低い。これは冬期のみならずモンスーン季に供給される大量の降雪の結果と考えられる。氷舌の位置は森林限界のはるか下にあり、この数十年のあいだほとんど変化していないという。アイス・フォールでの氷河の動きは激しく、轟音を発しながら巨大な氷塊が崩れ落ちていた。



梅里雪山山塊の位置

梅里雪山 明永氷河の概要



青海湖・蘭州・五台山周辺の氷河・周氷河地形

小野有五（北大・環境研）

東アジア地域全体を通して見たときの最終氷期の雪線高度は日本のその妥当性を検討する上でも重要かつ興味深い問題である。一方、最終氷期の北海道の永久凍土帯復元には大きく二つの意見があるが、これを解決するためには東アジア地域全体のデータが是非とも必要である。中国では長春でアイスウエッジカストが発見されており、その付近が連続的永久凍土帯であったことはかなり確実に近いと思われるが、南限に関しては研究者によって意見が分かれている。このような観点から見ると中国の氷河・周氷河地形に関するデータはまだまだ十分とは言えないのが現状であろう。そこで今回は今年現地調査の機会を得ることが出来た中国青海湖（チンハイフー）・蘭州・五台山（ウータイサン）周辺の氷河・周氷河地形について報告する。

青海湖付近ではカール底高度が3900—4000 mにあり、そこから谷をへて高度3000 m付近に扇頂を持つ扇状地が形成されている。西藏高原における現在の永久凍土分布下限高度は3700 m付近にある。蘭州周辺ではカール底高度から最終氷期の雪線高度は3400 m程度と考えられ、山頂高度約3000 mの五台山周辺には明瞭な氷食地形は見あたらず、森林限界（約2700 m）の上100 mくらいから山頂までは一面の岩塊斜面が、標高1500 m以上では堆積段丘の一つにつながる斜面堆積物が顕著になっている。

これらの地域のデータと、西安付近の最終氷期雪線3400 m、台湾の3400—3500 mをはじめ、ヒマラヤ、日本、カムチャッカなどのデータも加味してみれば、最終氷期の東アジア地域の等雪線高度線は太平洋側で急激に北西—南東方向に折れ曲がっていると考えられる。東アジア地域全体を通した永久凍土・周氷河地形の分布と今回の調査地域との関係については、また別の機会に詳述したいと考えている。（事務局記）